

詩編126編を先ほどお読みしました。この詩編は、イスラエルがバビロニアに奴隷として連行され、後にバビロンが滅んで解放された歴史を背景に読まれた詩だと言われています。荒廃した土地に、涙をもって種を蒔くひとは、故国に戻ったけれども荒廃した故郷をいかにして復興させるか、それは涙をもって種を蒔くような業だということです。しかし、きつと喜びの歌を歌いながら…と希望に満ちた将来を告げ知らせるのです。

この詩編とヨハネによる福音書4章30節以下を、比べながら、読み進むとイエスのなさった福音の種を蒔くということの意味がより深くくみ取ることができるようになりました。

まず、直感的に(今日も)、ミレーの「種を蒔くひと」という画が思い浮んできました。

ミレーの画は農民を題材にしたものが知られているようですが、生まれが農家だったゆえに農民の画を描くようになったのだと、わたしは思います。彼は1814年にノルマンディー地方の農家に生まれますが、18歳の時に画の修行をはじめ、才能が認められて奨学金を得て、パリに出て賞を獲得するなどし、結婚しますが、44年(30歳で)妻に先立たれていったん実家に戻ります、再婚してまたパリに出ます。当初は、肖像画や女性の裸体画などを描きながら生計を立てます。

しかし48年(34歳)のフランス2月革命から政治的な支援者を得て、農民の画を描くようになりました。彼の画はたくましく尊厳に満ちた農民の画が印象的です。「種を蒔く人」も力強い姿で描かれています。おそらく革命当時の時代の精神を映し出し、実際に農民たちも尊厳に満ちていたのでしょう。

しかしゴッホの「ジャガイモを食べる人々(1885年)」をご覧になった方は、薄暗い部屋でジャガイモを食べる貧しい農民の姿を思い浮かべるでしょう。いったいどちらの農民が、現実に近いのでしょうか?…ただしゴッホの「種を蒔く人」はさんと降り注ぐ太陽の目映いばかりの光の下で種を蒔くのですが、…。

このような二つの農民像があることを踏まえて、先ほどの詩編126編を読むならば、とりわけ5〜6節を読む際に、皆さんはどちらの立場に立ってお読みになるでしょうか?

5 涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。

6 種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は／束ねた穂を背負い／喜びの歌をつたいながら帰ってくる。

5節の「涙と共に種を蒔く人」、6節の「種の袋を背負い、泣きながら出て行った人」を読み返し、岐阜や青森の農村・地方の教会で出会った農家の人たちとの出会いを思い返すうちに、個人的な解釈にすぎませんが、一見力強く大地に種を蒔くこのひとと、泣いているように見えてきたのです。「種を蒔く人」が、深くかぶった帽子の陰に隠さ

れたまなざしは涙に潤んでいるかのように見えて仕方がないのです。

そうするとイエスがサマリアの女性といかに出会ったかが生きた人格をもったふたりとして理解できるようになりました。イエスは決してメシアとして尊大な態度で女と出会ったのではなく、涙をもって種を蒔くひととしてであったのだということ。

サマリアの女性のように、過去があり、深い苦悩にさいなまれて心を閉ざす人が、心を開いてくれるのは、いったいどういう時なのか?尊大で高慢な態度で「あなたを救ってあげるよ」と言われても、失礼しますとしか返答できないでしょう。

その喜びは計り知れないものです。さらにそのひとが、「イエスは、自分を救いに導く方であるのかもしれない」となると、涙を流して歓喜すること間違いありません。

イエスは、サマリアの女性が、ご自分のことを受け入れてくれたことで感極まっているところに弟子たちが戻ってきたので、唐突にも、「わたしにはあなた方が知らない食事がある」と言われました。心が満たされて食事のことなど忘れてしまっただけで喜んでおられたのでしょうか。その感極まるほどの食事とは「わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」と言われるのです。

つまりはじめは心を閉ざしていたサマリアの女性が、その過去を振り返り、自分自身と和解し、神と和解したこと

「このうえな／喜び、さあらじ」この方はメシアかもしれない  
ら」と(自分のことを認めてくれたからでしょう)。

サマリアの女性にとってもイエスにとっても、その出会いと和解のプロセスは、相対に熾烈で過酷なものだったと思われまふ。このサマリアの女のように過去に刻まれた癒えることがない深い傷をもち、凍てつくように冷め切った心を完全に閉ざし、敵意をむき出しにするようなひとと出会う時、何が求められるのか、何が必要とされるのでしょうか？その傷の痛みを深く理解すること、

…そのような出会い、苦しみのなかであえぐ人との出会いのなかで、なんとか事態を打開しようと思きかけたひとのこころを、かつて詩編(126編)の作者は「涙をもって種を蒔くひととは…」と詠んだのではないのでしょうか？

5 涙と共に種を蒔く人は／喜びの歌と共に刈り入れる。

6 種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は／束ねた種を背負い／喜びの歌をつたいながら帰ってくる。

だれしも、自分が労苦したことへの報酬は、やはり自分がそれを受けるべきだという確固たる基準にしたがって、生きているのではないのでしょうか？詩編もおなじです。労苦した者がそが、喜びの歌を歌いながら、刈り入れた種を背負い帰ってくる、のです。

この因果応報の掟が、深く悲嘆の淵に沈み、あるいは過去の傷の故に心冷め切ったひととの出会いを遮り、つな

がりを断ち切るのではないのでしょうか。

だから、ここで常識ある掟に生きるわたしたち、および詩編と、イエスがおっしゃる言葉には大きな断絶がありませんね。イエスは昔の諺をひいて、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』のです。ただし、種を蒔く人と刈り入れる人が違つたということは、悲しむべきことではなく、「種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶ」べきことだとイエスはおっしゃるのです。

イエスは、ご自身が種を蒔くひとであることを自覚しておられるが、その労苦の報酬、刈り入れを放棄なさるのです。それは、ただ放棄するだけにとどまらず、刈り入れる弟子たちが、種を蒔いたわたしと共に喜びにあずかるようになるためだとおっしゃるのです。涙をもって種を蒔く者は、喜びと共にその報いにあずかるべきだ、というその道からイエスは逸脱したのです。

サマリアの女性との出会い、その涙の報いを放棄なさるのです。それは何を意味するのか？箴言やヨブ記に照らしていうならば、

「箴11・18 神に逆らう者の得る収入は欺き。(正義を蒔く者には真実が報酬；月本訳) 慈善を蒔く人の収穫は真実。」

「箴22・8 悪を蒔く者は災いを刈り入れる。鞭は傲慢を断つ。」

「ヨブ4・8 わたしの見てきたところでは／災いを耕し、労苦を蒔く者が／災いと労苦を収穫する」とになつてゐる、

自分の犯した悪いことを口にし、それをかえりみる者は、自分の行った卑劣さを考える。そして人はその考えに束縛される。…彼はなおもその卑劣さの中に閉じ込められる。かくして彼の精神は粗野になり、その心は腐敗する。…

(ゲルのイサク・マイル…2世紀の律法学者)

この言葉を次のように言い換えることもできるでしょう。

自分の犯した正しいことを口にし、それをかえりみる者は、自分の行った高潔さ・気高さを考える。そして人はその考えに束縛される。早晩その人は高慢な人になるだろう。あなたは高慢のうちにとどまり、本意ではないとしても、苦悩する人との出会いを、遮りつつけるだろう。

そこで、イエスの種まきの業、その意味を、もう一度、考えてみるなら、弟子たちにはこういふふうにと響かないでしょうか？

「自分がなした正しいことも、ましてや悪いことも、それをかえりみる必要はもはやない。だから人は自分の正しさに、まして卑劣さにも束縛されることはない。かくして人の精神は自由になり、わたしが涙をもって蒔いた種の、刈り入れ、…歓喜あふれる人との出会い、信頼の構築だけ…に無神に専念するがよい。